

六卷本『略出念誦法』について

苔米地誠一

On the *Jin'gang ding yujia zhong lüechu niansong jing* in Six Scrolls

Tomabechi Sei'ichi

The *Jin'gang ding yujia zhong lüechu niansong jing* 金剛頂瑜伽中略出念誦經 in four scrolls 四卷 translated by Vajrabodhi 金剛智 is a ritual manual attached to the *Sarvatathāgatatt-vasaṃgraha* 初會金剛頂經. It represents the earliest translation into Chinese of a text belonging to the *Jin'gang ding jing* 金剛頂經 corpus. It was first introduced to Japan by Kūkai 空海.

Apart from this, we also have a six-scroll version of the *Jin'gangding yujia zhong lüechu niansong jing* brought to Japan by En'nin 圓仁, but it did not attain a wide circulation. In recent years, a manuscript of the text has been discovered and later published. This version is quite different from Vajrabodhi's four-scroll translation. The differences actually suggest that the text may have been translated from another source rather than being an edited augmented version produced in China on the base of the four-volume version.

The picture is complicated by the fact that a six-scroll version of the text belonging to a different lineage was discovered at the Tō-ji 東寺 and Ishiyama-dera 石山寺. The Ishiyama-dera manuscript appears to be a modified version which collates both the six-scroll version and Vajrabodhi's four-scroll translation.

Another textual witness is the *Jingang ding jing yi jue* 金剛頂經義訣, brought to Japan by Kūkai, a text which is considered an exegetical work dedicated to the *Jin'gangding yujia zhong lüechu niansong jing*. Unfortunately, only the first scroll of this text is extant, but judging from its citations from the *mūla*-scripture, it appears to be a commentary on the six-scroll version. However, rather than matching En'nin's text it corresponds to the Ishiyama-dera version. This suggests the possibility that the editorial work done on the Ishiyama-dera version was carried out in parallel with the exegetical efforts which resulted in the *Jingang ding jing yi jue*.

六卷本『略出念誦法』について

苦米地誠一

はじめに

これまで中国・陝西師範大学宗教研究中心により、同呂建福教授を主幹として四度にわたり中国密教國際學術検討會が開催されてきた。筆者は二〇一三年の第二回検討會、二〇一六年の第三回検討會、二〇一九年の第四回検討會と三回にわたって参加し、第二回検討會では「密教經典の日本伝来と成立―金剛智訳とされる經典をめぐって―」を発表し、陝西師範大学宗教研究集刊之一『密教研究』第三輯「密教文献整理与研究」(中国社会科学出版社、二〇一四年二月)に、第三回検討會の発表「六卷本『略出念誦法』と『金剛頂經義訣』」は同第六輯「中期密教注疏与曼荼羅研究」(中国社会科学出版社、二〇一九年八月)に、共に趙新玲女史による中国語訳が掲載されたが、日本語原稿は掲載されていない。また第四回検討會の発表「六卷本『略出念誦法』について―百八名讃を中心に―」は、原稿を提出しているが、まだその刊行を聞いていない。既に刊行されていたとしても、やはり同女史による中国語訳のみで、日本語原稿の掲載は予定されていない。本稿は『略出念誦

法』に関わる第三・四回検討會に発表した日本語原稿を一本にまとめ、その後の知見を加えて新たに稿を改めたものであり、前稿に提示した推論を修正した。また夫々の原稿に「資料編」として掲載した金剛智訳四卷本『略出念誦經』・円仁将来六卷本『略出念誦法』・東寺觀智院所藏本・石山寺所藏本・『金剛頂經義訣』の本文対照は、紙数の関係から省略し、必要に応じて本文中に指摘するに止めた。

一 六卷本『略出念誦法』の発見と校訂出版

金剛智三藏(六七一〜七四二)訳の『金剛頂瑜伽中略出念誦經』(『略出念誦經』)四卷は初会『金剛頂經』の儀軌の一つであるが、本格的な『金剛頂經』系文献の訳出としては中国で最初のものである。『略出念誦經』は『開元録』に入蔵しており、金剛智の訳出であることが確認される。一方で『金剛頂經大瑜伽秘密心地法門義訣』(『金剛頂經義訣』)は『略出念誦經』の註釈とされ、『密教大辞典』には金剛智の口決を弟子である不空三藏(七〇五〜七七四)が筆記したともされるが、上巻のみしか現存しない。またその注釈は金剛智訳

に対するものではなく、弟子の不空による同本異訳の六卷本『略出念誦經』に対するものとされる。しかし不空の訳経事業は師金剛智の入滅以降になつてからであり、不空訳に対して金剛智が註釈をすることは考えがたい。或いは不空の作ともされ『仏書解説大辞典』や『大正藏経目録』では不空撰述とする。一方で不空訳とされる六卷本『略出念誦法』は慈覚大師円仁(七九四～八六四)・安祥寺僧都恵運(七九八～八六九)・禅林寺僧正宗叡(八〇九～八八四)等によつて日本へ将来され、円仁の著作である『金剛頂大教王経疏』の中に「別本」と称して引用されている。

この円仁等将来の六卷本『略出念誦法』は長くその存在が知られていなかったが、昭和五十七年(一九八二)に清田寂雲氏により滋賀県津市・西来寺所蔵写本が発見・紹介され、^①また同時に三崎良周氏にも取り上げられ、^②後に『続天台宗全書』中に翻刻・収載された。^③一方その間に新潟・乙宝寺に伝来した六卷本『略出念誦法』の存在が明らかとなり、遠藤祐純氏と筆者との共著として金剛智訳四卷本との対照研究を報告した。^④これを受けて遠藤先生を指導教授とし、筆者を研究代表とする大正大学総合仏教研究所金剛頂経研究会を発足させ、更に多くの写本を調査・発見し、校訂・訳注作業を続け、平成十一年(一九九九)に『続天台宗全書』版を含めた既知の全伝本を校訂した本文と訳注を合わせて出版した。^⑤またこの調査の過程で円仁将来本(円仁本)とは異なる六卷本の異本が東寺観智院金剛藏聖教中より発見され(東寺本)、更には石山寺聖教中からは、本文が六卷本と類似する四巻に調査された別本(石山本)が発見され、やはり大正大学総合仏教研究所金剛頂経研究会により翻刻が出版された。^⑥筆者は東寺本・石山本発見時の調査には参加していたが、円仁本の出版後、種智院大学へ移つたことにより、東寺本・石山

本の翻刻・出版の時点では同研究会を離れていた。そのため、その成果は残つたメンバーの努力によるものであることを記しておきたい。

ただし六卷本『略出念誦法』も、その註釈とされる『金剛頂経義訣』も、経録類には著録されていない。また大村西崖氏は『金剛頂経義訣』は不空の撰述と伝えるが、巻首に名前が無く、筆も不空のものに似ない、として偽撰文献とする。^⑦ところで円仁本と別本の東寺本、石山本は、これまで写本によつてのみ伝えられてきたが、共に題名が「金剛頂瑜伽中略出念誦法」とされ、末尾が「経」ではなく「法」とされる。もつとも金剛智訳四卷本も『開元録』では「金剛頂瑜伽中略出念誦法」とされ、元来の題名が「法」であつた可能性はあろう。ともかく石山本を含めて六卷本系統の諸本は皆「法」であるので、本稿ではこれ以降「法」を六卷本系統の名称として使用する。

二 六卷本の諸本

六卷本『略出念誦法』は円仁・恵運・宗叡によつて日本へ将来されている。円仁の将来については『録外経等目録』『円仁録外』の中に「金剛頂瑜伽中略出念誦經一部六卷」^⑧とあり、恵運の『恵運律師書目録』には「佛説金剛頂瑜伽中略出念誦經一部六卷」^⑨と見られる。但し恵運は四卷本を将来している。また宗叡の『新書写請来法門等目録』には「金剛頂瑜伽中略出念誦經一部六卷不空三藏譯」^⑩とあり、また四卷本も著録する。なおこの六卷本『略出念誦法』を不空訳とするのは宗叡の目録のみである。一方で五大院安然(八四一～八八九)の『諸阿闍梨真言密教部類総録(八家秘録)』には次のよう^⑪にある。

『金剛頂瑜伽中略出念誦經六卷 金剛智（仁録外）』

『仏説金剛頂瑜伽中略出念誦經一部六卷（運与前本少異也）』

『金剛頂瑜伽中略出念誦經四卷 金剛智（海珍治六為四頗有加減）』

『金剛頂瑜伽中略出念誦經四卷（觀与前少異也）』

『金剛頂瑜伽中略出念誦法四卷（亦云經貞元録梵釈寺円覚寺欠注私云上三同經已上六四兩經治定也治六為四互有加減）』

これからすると安然是四巻本も六巻本も、共に金剛智の訳出と考えていたようであり、調巻の相違は治定によるもので、初め六巻であったものを治定して四巻にしたものとする。しかし『開元釈教録』には「金剛頂瑜伽中略出念誦法四卷（亦云經）大唐南天竺三藏金剛智譯」とあり、『貞元新定釈經目錄』でも同様である。従って安然の推理する金剛智訳本が六巻本を四巻に直したというのは間違いであるが、これに対して杲宝（一三〇三〜一三六二）の『宝冊抄』には、逆に四巻本を治定して六巻にした可能性について述べている。これらについては既に遠藤祐純氏により指摘されているので参照されたい。ただし金剛智訳四巻本と不空訳とされる六巻本では、その本文がかなり相違しており、単なる「治定」とは言えない。六巻本を不空訳とするのは宗叡の目録だけであり、円仁・恵運の目録には記載が無い。『八家秘録』では共に金剛智訳としており、金剛智訳に六巻本と四巻本があったとする。安然是円仁に直接師事しており、今の問題についても円仁の話を知っていたことが考えられる。また円仁自身『金剛頂大教王経疏』に四巻本を「旧経」とし、六巻本を「別本」として引用するが、その訳者については何も触れない。これらのことからすると円仁もまた四巻本・六巻本共に金剛智の訳と考えていた可能性はあろう。

また『金剛頂経義訣』の註釈する『略出念誦經』が金剛智訳四巻本ではなく、六巻本系統であることは、引用本文を比較すれば理解される。

ここで円仁本と東寺本・石山本との相違であるが、東寺本の本文は円仁本とほぼ一致しているものの、真言の音写漢字に相違が見られ、また各々に梵字表記が加えられている。音写文字の相違で最も目に付くのは *V.ḥi.a*（金剛）を金剛智訳・円仁本・石山本共に「跋折羅」とするのを、東寺本は「𑖀日囉」とする点であろう。他の相違も見られるが、少なくとも *ḥi* 音は全て「𑖀」字とするようである。また現存写本では明らかな誤写と見られる箇所があり、また転写過程での乱丁の跡も見られる。例えば第九品の次に第十九品が挟まり、次いで第十一品以下が続き、第十八品の次に第十品が来る。しかし第十品の終りの阿闍の四親近菩薩をまとめた一文は第十九品の終りに存在し、書写原本の一部に乱丁のあったことが知られる。また他にも写本における一・二行分の前後錯乱や明らかな欠落なども見受けられ、必ずしも善本とは言えないが、本文を校訂する資料が不足しているため、現状では十分な訂正ができない。

これに対して石山寺所蔵の四巻『略出念誦法』は、その前三巻が円仁本の相当部分とかなりな程度で一致し、また第四巻が金剛智訳の第四巻と一致する所の多い特異な伝本である。四巻に調巻されているが、品題五十のうち最初の第一〜五までを欠いている。調巻の位置を金剛智訳四巻本と較べると、第一巻の切り方は第十五品の一品分だけ石山本の方が短いが、第二・三巻、第三・四巻の切り分け方は金剛智訳と同じ位置に合せており、そのために品の途中で分巻されるという不自然な調巻となっている。また六巻本『略出念誦法』の各巻の尾題がそのままに残されており、巻の途中に尾題が存在する

ことになる。また第四巻の本文は金剛智訳に近似しながら六巻本と同じ品題が該当箇所が存在しており、注意される（前稿では第四巻部分の品題が無いとしたが、見落としてであり、実際には存在するので訂正しておく）。

円仁本に比べて金剛智訳と一致する部分が多く、真言の大半は金剛智訳に同じである。また円仁本や東寺本が「真言」の語を全て「陀羅尼」と表記するのに対して、石山本は金剛智訳と同じ「密語」の語をもって示している。

『金剛頂経義訣』ではこれを「真言」としており、原語が「mantra」であることは間違いが無い。とすれば金剛智訳と石山本の「密語」は訳語として正しいが、円仁本や東寺本の「陀羅尼」は間違つたものといわなければならぬ。これについては翻訳原典の異なる可能性も考慮される。

これに関連して注意されるのが、六巻本に見られる各品題の次に「佛言」「爾時佛言」「爾時世尊告言」などの句が付加される点であり、六巻本諸本共通の特徴といえる。ただし三十二尊の出生段では金剛智訳四巻本に「爾時世尊毘盧遮那復入菩薩」とあるのに一致しており、「佛言」などの付加は認められない。また石山本の第四巻は六巻本と同じ品題が見られるものの、本文は金剛智訳と一致しているため「爾時世尊告言」の文が見られない。

また遠藤祐純氏の指摘されている所であるが、円仁本では「三摩耶」を「三摩地」と表記する箇所が見られる。金剛智訳の「三摩耶所生」や「三摩耶智」「三摩耶契」が、円仁本・東寺本で「三摩地所生」や「三摩地智」「三摩地契」などとなっている箇所がある。一部には円仁本・東寺本も「三摩耶」「三昧耶」とする所があるが、十六大菩薩出生段以降は「三摩地」となってしまう。しかし石山本では「三摩耶所生」「三摩耶智」となっており、金剛智訳に一致している。また『金剛頂経義訣』所引の経本文では

「三昧耶」となっていることは注意される。

また金剛智訳の十六大菩薩出生段で「平等性智」とあるところが円仁本・東寺本では「大円鏡智」となっている。遠藤祐純氏は『金剛頂経義訣』・円仁撰『金剛頂大教王経疏』・六巻本（円仁本）・四巻本・三巻教王経（初会『金剛頂経』）を対比して、円仁本と『金剛頂大教王経疏』で金剛薩埵が大円鏡智、金剛宝は平等性智、金剛法が妙觀察智、金剛業が成所作智となっており、四智に配当されていることを指摘されている。これが石山本では金剛智訳・三巻『教王経』と同様に「平等性智」となっており、『金剛頂経義訣』には金剛薩埵出生段しか無いが、これとも一致する。

このように六巻本『略出念誦法』系統の諸本の中で、石山本は金剛智訳に近い部分が多く、また『金剛頂経義訣』とも一致点が多いということが出来る。このことは『金剛頂経義訣』の註釈している『略出念誦法』が石山本系統の本であることを意味していると言えるのではないか。

三 『金剛頂経義訣』

ところで『金剛頂経義訣』は正しくは「金剛頂経大瑜伽秘密心地法門義訣」という。経録類に記載が無く、空海の『御请来目錄』¹⁵に初めてその名を見る事ができるが、作者名は示されない。『三十帖策子』中にも収録されるが、やはり作者名は見られない。空海の『秘密曼荼羅教付法伝』には『金剛頂経義訣』に説かれる南天铁塔説を金剛智三藏の口決であつて経論の文証が無いとする溈派子の批判を引いて、伝法の聖者の言葉信じなければいけないとする¹⁶。ただこの「溈派子」に比定される徳一（一八一四）の『真言

宗未決文」「第十一鉄塔疑」では「真言宗徒の伝えて云く」として伝聞による疑問を述べているようであり『金剛頂経義訣』そのものは見ていないようでもある¹⁷。即ち『金剛頂経義訣』を金剛智の口説とするのは空海の理解であったと見られよう。『密教大辞典』などで金剛智口説・不空記とする根拠はこの空海の理解ではないだろうか。

一方で安然の『八家秘録』には

金剛頂経大瑜伽秘密心地法門義訣一卷（智藏。仁海云金剛頂瑜伽秘密心地法門義訣一卷¹⁸）

と見られる。また谷阿闍梨皇慶（九七七～一〇四九）口・大原僧都長宴（一一〇一～一〇八二）記『四十帖決』には『金剛頂経義訣』の作者について次のような記事を残している¹⁹。

義決 十五 長久四年九月三十日説

義決不空製也。智藏者即是也。云云。

永承三年壬正月 義決者是智藏三藏所製也。或一本注。一行阿

闍利記者大誤。又義決积経六卷本也。所帖文、全同也。云云

このように天台宗では作者を不空（智藏）とする伝承が伝えられるが、安然が伝えているということは、円仁の伝であろうか。ともかく既に空海が日本へ将来していることは、惠果（七四六～八〇五）の時代には唐の仏教界に存在していたものであり、その時点で金剛智口・不空記という伝承のあったことが考えられる。

『金剛頂経義訣』には四卷本『略出念誦経』の翻訳に関わる状況について次のような記事を載せる。

此略本至此土者於開元之初金剛菩提三藏阿闍梨云。我從西國發來度於

南海其有大船三十餘隻（中略）漸漸發來得至此岸來到此國。於開元七年中至於西京。一行禪師求我灌頂。聞有此異希有法門乃令伊舍羅譯爲漢文。一行等乃親自筆受。一依梵本次第而述其意不失句義未圓。此以竊觀諸修行者縱有尋讀莫知所從。又淺智愚識亦爲難入。今以此承旨授頗得其趣。祕密之旨略在文言屬。法流行強開方便²⁰。

これは金剛智の話した言葉を記したもので、必ずしも『金剛頂経義訣』の全体を金剛智の口説とするものではない。これに対して『開元録』には

沙門跋日羅菩提。唐云金剛智（中略）聞大支那仏法崇盛。遂汎舶東遊達於海隅。開元八年中方屆京邑。於是弘秘教建曼荼羅。依法作成皆感靈瑞。沙門一行欽斯秘法成就諮詢。智一指陳復爲立壇灌頂。一行敬受斯法請訊流通。以十一年癸亥。於資聖寺爲訊瑜伽念誦法及七俱胝陀羅尼。東印度婆羅門大首領直中書伊舍羅訊語。高岳沙門温古筆受。至十八年庚午。於大薦福寺出曼殊室利五字心及觀自在瑜伽要。沙門智藏訊語。又於旧随求中更統新□。智執総持契所至皆驗。秘教流伝寔斯人矣²¹。

とある。これは金剛智の事跡・伝記であるが、一行の求めに応じて灌頂壇を建て（灌頂を授け）、一行の經典翻訳の要請によって、東インドの婆羅門伊舍羅を訊語とし、高岳沙門温古を筆受として『略出念誦経』と『七俱胝陀羅尼』を訳している。後に不空が訊語となって『曼殊室利五字心』と『觀自在瑜伽要』の翻訳をしているが、温古は一行没後に『大日経疏』を再治して『大日経義釈』とした僧の一人である。従ってこの間の金剛智と一行との状況について、より以前に金剛智の弟子となっていた不空がよく知っていたことは間違いない。金剛智の入京時期が一年異なっているが、大きな問題では無いであろうし、『金剛頂経義訣』の伝える金剛智の具体的な話について

疑うべき所はない。これを記録することは、金剛智に近い人物の作として良
いと考えられる。またこの金剛菩提三藏阿闍梨の言葉以外の部分については、
金剛智の口説とすべき理由は無い。南天鉄塔相承説についても、内容は竜樹
による竜宮からの『華嚴経』大本求得の話をモチーフにしていることは明ら
かであり、文脈上からは不空が南天竺へ求法した折りに伝え聞いた伝承とし
て理解することができよう。

確かに恵果は不空最晩年の弟子であり、空海は恵果最晩年の灌頂弟子であ
る。空海の入唐は不空没後三十年を経ている。その間に不空に仮託された文
献の偽作された可能性が無いとは言えない。しかし不空の直弟子である恵果
の下で空海の入手した『金剛頂経義訣』は、不空自身ではないまでも、不空
に極めて近いところで成立したと考えて差し支えないであろう。

現存する『金剛頂経義訣』上巻²⁰の注釈は、六巻本『略出念誦法』第二巻初
頭にある阿闍如来の四親近菩薩出生段までで終わっている。しかしその所積
部分の経本文だけでは無く、それより以降の経本文をも引用しており、それ
も六巻本に一致している。

例せば、六巻本の「啓請四方如來求授灌頂以身奉施歸命品」第四の

佛言凡誦降伏陀羅尼（中略）於諸部中若不能結如來坐跏趺坐任結如來坐
跏全坐結或大菩薩坐跏半坐結隨意作之。行者欲自求清淨及欲淨除一切衆
生煩惱垢者應當誦陀羅尼曰（中略）論曰以一切法自性清淨故我亦自性清
淨。復應思惟是諸衆生無始已來流轉生死皆由黑闇所覆慳貪垢重我令爲除
彼等煩惱皆令成就世間出世間諸悉地智作是念已誦陀羅尼曰

に対する『金剛頂経義訣』の注釈は

於前自利門中復分爲三。第一從初乃至或大菩薩坐結加已乃至隨意作之等。

總是三業四儀淨除業障法。第二從行者欲自清淨下乃至復自思惟所持祕密
明至已來。總入智三摩地門諸佛境界實相智印法。第三從復自思惟下乃
至修習瑜伽已來。總融愚入智成等正覺住大菩提法

となっており、この中の傍線部は六巻本第三巻の「鉤索鎖鈴攝入四大護金剛
品」第二十六における「如上次第盡是諸部眷屬壇場主及金剛薩埵等爲首應各
思惟諸菩薩三摩地乃至形狀服飾所執記契一一分明已復自思惟所持陀羅尼主菩
薩威儀色相」からの引用であることが分かる。

即ち『金剛頂経義訣』上巻の成立時には六巻本『略出念誦法』の全体が先
に成立していたことを示唆している。また『金剛頂経義訣』所積の六巻本
『略出念誦法』の本文は、先に指摘した「密語」「真言」と六巻本の「陀羅
尼」「三摩耶」と「三摩地」、「平等性智」と「大円鏡智」の問題など、金剛
智と円仁本・東寺本との相違に対して、石山本が金剛智に一致し、『金
剛頂経義訣』の訳語・音写がそれに対応している。即ち『金剛頂経義訣』所
積の『略出念誦法』は、円仁本よりも以上に、石山本に一致している。もつ
とも円仁本は六巻全体が訳されており、それに対して石山本は円仁本の本文
の一部を金剛智訳に入れ替えたもののように思われる。石山本の第四巻の本
文が金剛智訳の第四巻と同じであることは、先に円仁本（六巻本）の全体が
訳出され、それと金剛智訳を校合し、一部の本文を入れ替えながら石山本が
作られていったと考える方が、妥当性が高いようにも思われる。或いは全て
に共通した六巻本『略出念誦法』の祖本が成立し、これを改変して円仁本と
東寺本が成立し、また同じ祖本を金剛智訳と校合しながら修正したものが石
山本であった可能性も考えられよう。また逆に金剛智訳の本文を六巻本の本
文へ変更する途中の段階が石山本であるという見方もできるかも知れない

(この途中段階説は、後に述べるように可能性は低いであろう)。しかし必ずしも確定的なものではなく、他の可能性も考えうるものではある。

四 六巻本の百八名讃

次に六巻本である円仁本と東寺本、石山本、そして金剛智訳の百八名讃本文を比較して見てみたい。また合わせて不空訳三巻本『金剛頂一切如来真実撰大乘現証大教王経』(初会の金剛頂経の漢訳)の百八名讃も参考にしたい。

ここで六巻本の百八名讃は「讃誦一百八金剛菩薩異名品第三十三」に説かれるが、金剛智訳と比較して分量が二倍近くになっている。またその増広分は十六大菩薩出生段から取り込まれたものであろうことが指摘できる。また石山本は、百八名讃については金剛智訳に一致する部分があるが、しかしその前後は円仁本・東寺本と一致している。金剛智訳の百八名讃は、基本的に三巻本(初会の『金剛頂経』)に一致しており、逆に言えば六巻本のみが特異な本文になっているということもできる。したがって石山本は、その特異な本文の一部を金剛智訳の本文と入れ替えることによって、当たり前の百八名讃へ修正したという見方も可能になる。

冒頭部分

円仁本の百八名讃の冒頭は「讃誦一百八金剛菩薩異名品第三十三」とい品題の後に

爾時世尊告言持誦修瑜伽者念誦畢已晨中午後初夜初夜半五更皆須誦此

一百八異名時時皆不得闕若能常誦持誦所求果願速成就而誦讚曰
という本文で始まっており、東寺本・石山本も全く同じであるが、金剛智訳は品題が無く

次誦如上所説一百字密語。及以盪伽水而奉獻之。次修習金剛薩埵大契。
速疾誦最上一百八名一遍

とあって、全く異なっている。この「爾時世尊告言」の句が付加されるのは、六巻本諸本共通の特徴といえるが、修瑜伽者は念誦の終わった後に晨・中・午後・初夜・初夜半の五更に百八名讃を誦すれば求める所の果願を速かに成就できるとする。金剛智訳が、前の百字真言を誦して盪伽水を奉獻し、金剛薩埵大契を修習して百八名讃を誦するのとは、修法の次第、百八名讃の役割が異なっている。

(一) 金剛薩埵

先ず金剛薩埵について円仁本では「我今敬禮諸如來 普賢金剛尊上首 金剛薩埵現神通 執金剛威降三世 摩訶金剛大薩埵 普現月輪降心穢 五股金剛住佛掌 五峯光明遍世界 轉正法輪引衆生 寶冠繪綵授灌頂」とあるが、傍線を引いた偈前半の「我今敬禮諸如來 普賢金剛尊上首 執金剛威降三世 摩訶金剛大薩埵」については金剛智訳や三巻本ともほぼ対応しよう。ただしここに「威降三世」とある点には注意される。この語句がここに入った理由については直ちに明らかにできない。降三世明王は金剛頂経の明王(忿怒尊)であるが、その他の漢訳『金剛頂経』系儀軌類の百八名讃・十六大菩薩出生段には、管見の範囲、見られないようである。もっと広い範囲で見れば

金剛薩埵と降三世明王との関係を示すテキストは探しうるであろうが、今はその指摘だけに止めておく。

また偈の後半の「普現月輪降心穢 五股金剛住佛掌 五峯光明遍世界 轉正法輪引衆生 寶冠繪綵授灌頂」が金剛薩埵出生段から取り込まれたものであることは、本文の比較から明らかであろう。勿論、十六大菩薩出生段の各菩薩の記事は長文であり、単純に要略したものという事はできないが、円仁本の金剛薩埵出生段の中に対応する語句を拾ってみると「普賢之心爲衆多月輪出現普淨一切衆生大菩提心已」「満虚空界成五峯光明時於華光明中化一切如來金剛身語意所成五股跋折羅住佛掌」「跋折羅出種種色相光明遍照一切佛世界」「轉正法輪教化成就無量衆生」などの文言を見ることが出来る。しかし円仁本金剛薩埵出生段には「寶冠繪綵授灌頂」相当文が見られない。しかし金剛智訳や根本タントラの漢訳である三巻本には「爲彼普賢大菩薩應以一切如來轉輪位。故以一切如來身寶冠繪綵而灌頂之。既灌頂已而授與之。」または「一切如來轉輪王灌頂。以一切佛身寶冠繪綵。灌頂已。授與雙手」などとあり、百八名讚の「寶冠繪綵授灌頂」の語も金剛薩埵出生段によるものと見られる。

また石山本は「金剛薩埵現神通 執金剛威降三世 摩訶金剛大薩埵」とあり、円仁本の本文を残しながら、本来の百八名讚相当分のみとし、金剛薩埵出生段から取り込まれた部分を削除した形となっている。

(二) 金剛王菩薩

次に金剛王菩薩について見ると、円仁本の「敬禮如來不空王 妙覺最上金

剛鉤 金剛鉤身住佛掌 從鉤出現微塵佛 金剛請引入道場」の傍線部が百八名讚によるものであるが、「妙覺最上金剛王」とあるべき「王」が「鉤」となっている。「身住佛掌」は出生段の「金剛鉤住佛掌中」、「爲作神變等佛事」は「一切如來作種種神變等事」、「金剛鉤授不空王」は「以金剛鉤授彼不空王大菩薩雙手」、「金剛鉤名授灌頂」は「以金剛鉤名號而與灌頂」にトレースで見ることが出来る。円仁本の金剛薩埵出生段に見られなかった灌頂の記述も金剛王出生段には見ることが出来る。金剛智訳の対応箇所は「以爲一切如來之大鉤。出已便即於世尊毘盧遮那掌中而住」「及一切佛神變作」「即於彼不空王大菩薩。如上於雙手而授之」「以金剛鉤召名號。而灌頂之」ということになるが、語句的には円仁本の出生段本文に近い。

石山本は「我今敬禮如來不空王 妙覺最上金剛金剛王 金剛王金剛鉤金剛請引」とあり、一部に余分な語句があるが、ほぼ金剛智訳と一致し、円仁本とは異なったものとなっている。勿論、同じ『略出念誦經』の異本であるから、大凡の文は同じであるが、語句を詳細に見れば円仁本から金剛智訳の本文へ変更されているといえよう。

(三) 金剛愛菩薩

金剛愛菩薩では、円仁本の「我今敬禮能調伏 摩羅諸欲華器仗 金剛弓身住佛掌 金剛箭現微塵佛 金剛愛染無怯畏 摩訶安樂喜悅敬 摩訶金剛壞雜染」の傍線部が金剛智訳の百八名讚に一致する。夫々の語句に付けられた「華器仗」「住佛掌」は金剛愛出生段に見られる。「現微塵佛」は「從彼金剛箭出現一切世界微塵等如來身」の略抄であろう。「無怯畏」「喜悅敬」「壞雜

染」については、全く一致するという訳ではないが内容的に相当するものは確認できよう。また「由至極殺得清淨」「金剛箭名受灌頂」は円仁本・金剛智訳本の金剛愛出生段のどちらとも近いが「故現染已能調伏」は円仁本が「能以染故 而調伏之」とあり、金剛智本が「染故能調伏」であって、語句的に見れば円仁本の出生段に近い。

一方で石山本はこれより以下の百八名讃において金剛智訳の本文に一致し、円仁本とは異なっている。

(四) 金剛喜菩薩

金剛喜菩薩では「敬禮金剛大善哉」「金剛歡喜」「摩訶悅喜」「歡喜王」「妙觀薩埵智上首」「金剛首」「金剛喜躍」については百八名讃によるものである。夫々の語句に付く「出魔境」「發心者」「音同讚美」については不明であるが「住佛掌」は円仁本出生段に「爲金剛歡喜體住佛雙手掌」と見られる。金剛智訳は「爲金剛歡喜體。住於雙手掌中」とあり「仏」が抜けている。その後の「從歡喜生微塵佛」は出生段の「從歡喜體中出一切世界微塵等如來身」であろうが「一塵佛身現無邊 滅惑必至金剛智」については不明。「若聞我名衆生喜」は偈頌に「若聞我名 常生歡喜」と見られ「踊躍善哉授灌頂」は「以金剛踴躍名號而與灌頂」とあって、やはり出生段にトレースできる。金剛智訳では「分別斷除 聞常歡喜」「爲金剛踴躍。以其金剛名而灌頂之」であり、円仁本に近い。

石山本は金剛智訳に全く一致している。

(五) 金剛宝菩薩

金剛宝菩薩は、円仁本の「我今敬禮金剛寶」「摩訶摩尼」「妙金剛」「義金剛」「金剛富饒」「金剛藏」「金剛虚空」は、順序の異なる所はあるが、金剛智訳の百八名讃にトレースできる。しかし「無價寶」「淨如瑠璃」「智能了性」「雨鬘瓔珞」は、そのままの表現の典拠は不明である。また「住佛掌」「示佛刹」は金剛宝菩薩出生段にその表現は見られないが、他の菩薩の出生段で確認できる。「虚空寶藏授灌頂」は出生段には「以金剛寶名號而與灌頂」とあり、金剛智訳の出生段には「以金剛宝藏灌頂」とあるが、金剛宝菩薩が虚空藏菩薩であることは出生段中に示されているので、これによるというて良い。「散寶成雲在空住」の句は実又難陀訳八十卷『華嚴經』「十地品」第七地冒頭の偈頌²⁵⁾に見られるが「金剛寶香遍世界」についても直接の典拠は不明。全体として六卷本・金剛智訳の出生段にトレースできない表現が見られるが、虚空藏菩薩の功德との関係から考えれば理解できないものではない。漢訳資料だけではなく、還梵した原典探査を行えば何らかの典拠を見出すことができるかも知れないが、今その準備はない。

ここでも石山本は金剛智訳に一致している。

(六) 金剛光菩薩

金剛光菩薩は円仁本の「敬禮金剛大威徳 超過微塵衆日威 天龍光明滅無餘 由如法王得自在 金剛日身住佛掌 最勝光明現佛刹 經書辭論悉明現

爾乃踰於心境界 金剛輝顯佛神力 摩訶威德住三昧 摩訶光焰普明了 智輪
清淨與佛會 金剛光淨遍三界 無垢威光授灌頂」も傍線部が金剛智訳の百八
名讃にトレースできる。また「超過微塵衆日威」は出生段の「從金剛日中出
一切世界微塵等如來身」が相当しよう。「金剛日身住佛掌」の句は出生段に
見られ、「無垢威光授灌頂」は出生段に「以金剛光明名號而與灌頂」とある。
これに対して「由如法王得自在」は八十卷『華嚴經』「毘盧遮那品」第六の
大威光菩薩の偈頌に「當如法王得自在」²⁶の句が見られ、「經書辭論悉明現」
は『華嚴經』「十地品」第七地に「經書詞論普明了」とあり、「爾乃踰於心境
界」は同じ七地に「若住第八智地中 爾乃逾於心境界」²⁷見られる。その他に
ついてはまだ確認できていない。この漢訳八十卷『華嚴經』と一致する語句
の存在は「威光菩薩」の一致によるものであろうが、原典によるものという
よりも漢訳を経由したものと見るべきか。

石山本は、ここでも金剛智訳と一致する。

(七) 金剛幢菩薩

金剛幢菩薩は、円仁本の「我今敬禮金剛幢 善利衆生檀波羅 金剛光威滅
貧苦 善歡喜心能普護 無比幢身住佛掌 金剛寶幡現佛刹 寶幢雨鬘寶瓔珞
大金剛寶千萬種 金剛寶杖起菩提 金剛表刹授灌頂」の傍線部が金剛智訳の
百八名讃に一致する。「善利衆生檀波羅」の檀波羅は出生段に「彼金剛幢令
一切如來於檀波羅蜜相應」また「即是檀度門」「一切如來檀波羅蜜智」とあ
る。また「無比幢身住佛掌」は出生段に「金剛幢身住佛掌」とあり、「金剛
寶幡現佛刹」は出生段の「從金剛幢中出一切世界微塵等如來身皆建立一切如

來寶幢等事」に相当し「金剛表刹授灌頂」は出生段に「以金剛表刹名號與其
灌頂」とある。ここには『華嚴經』の本文は見られないようである。

石山本は金剛智訳に一致。

(八) 金剛笑菩薩

金剛笑菩薩は、円仁本の「我今敬禮金剛笑 金剛微笑諸含識 摩訶笑身住
佛掌 摩訶希有現佛刹 樂生歡喜示供養 金剛受塗香供養 金剛歡喜同佛笑
金剛笑名授灌頂」の傍線部が百八名讃に一致する。東寺本には欠字があるが、
円仁本と同じと見られる。「摩訶笑身住佛掌」はそのまが出生段に見られ、
「摩訶希有現佛刹」は「從金剛笑出一切世界微塵等如來身皆現一切如來希有
神變遊戲等」が相当するであろう。「金剛笑名授灌頂」は「金剛笑授與常愛
歡喜根大菩薩雙手是時一切如來共以金剛愛名號而與灌頂」から導かれる。

石山本は金剛智訳に一致。

(九) 金剛法菩薩

金剛法菩薩の「我今敬禮金剛法 善利薩埵眞大悲 善清淨心即三昧 觀音
變現難可測 觀世自在無障碍 無有慈悲能比類 大蓮華身住佛掌 光出蓮華
華有佛 妙觀察智遍十方 妙金剛眼視一切 金剛眼慈福無量 金剛眼名授灌
頂」の傍線部は金剛智訳百八名讃に一致する。ただし「妙金剛眼」は金剛智
訳では「金剛妙眼」となっている。「大蓮華身住佛掌」「妙觀察智」「金剛眼
名授灌頂」は出生段にトレースできる。勿論、五智の一である妙觀察智は、

五仏としての金剛界阿弥陀に配当されるが、観自在菩薩は阿弥陀の眷属であり、金剛法菩薩は金剛界阿弥陀の四親近菩薩の第一であって、出生段自体に金剛法菩薩＝金剛眼菩薩の三摩地が妙觀察智であることが示される。また「光出蓮華華有佛」はやはり出生段の「彼光明法界還同一體相入毘盧遮那佛心爲虚空界量大蓮華身住於佛手中從彼蓮華出一切世界微塵等如來身」を要略したものとみなせようか。これに対して「観音變現難可測」について「變現難可測」の句は八十卷『大方広仏華嚴經』「十住品」第十五に「神通變現難可測」と見られるが、これは観音を指すものではない。「無有慈悲能比類」「慈福無量」などの句は『妙法蓮華經』「観世音菩薩普門品（『観音經』）」の「悲体戒雷震 慈意妙大雲」や「具一切功德 慈眼視衆生 福聚海無量」などで知られる慈悲の尊格としての観音に拠るものと推測することができよう。であるならば「観音變現難可測」も観音が三十三身に化身して衆生を濟度することを指すと見ることもできようか。観音（観自在）に関わる經典は極めて多いために、何を典拠とするとも言い難いが、『金剛頂經』系儀軌における観自在は、その清浄性が強調されるのに対して、ここに見られる観音の慈悲の性格は、通大乘の性格を継承したものと考える。

石山本は金剛智訳に一致。

(一〇) 金剛利菩薩

金剛利菩薩の「我今敬禮金剛利 摩訶衍那大乘器 摩訶器仗鎮摧魔 文殊師利慧猛利 金剛藏法辨無窮 金剛甚深梵音美 金剛劔身住佛掌 智慧神力名吉祥 金剛覺分斷習氣 般若揮破授灌頂」の傍線部は金剛智訳に一致する。

「摩訶衍那大乘器」の「大乘器」も、続く「摩訶器仗」として理解できよう。「金剛劔身住佛掌」はそのままだ出生段に見られる。ただし円仁本が「金剛劔身住於佛手」であるのに対し金剛智訳が「便為劔鞘。既成就已。住於毘盧遮那仏手中」とあり、円仁本に近い。「般若揮破授灌頂」については出生段に「金剛覺名號與其灌頂時金剛覺大菩薩以其金剛劔揮斫」と見られる。金剛智訳もほぼ同じ。「智慧神力名吉祥」は文殊師利を指すもので、「分斷習氣」は「斷除煩惱三摩地」を当てることができよう。その他の語句も文殊菩薩の性格に由来するものといえよう。

石山本は金剛智訳に一致。

(一一) 金剛因菩薩

金剛因菩薩の「我今敬禮金剛輪 摩訶理趣纒發心 金剛因智最第一 大堅實心難退敗 金剛起初轉法輪 金剛道場隨應現」の傍線部は金剛智訳に一致する語句である。「金剛輪身住佛掌 金剛輪現微塵佛」「由纒發心轉法輪 金剛成就不退轉 金剛眼輪授灌頂」はほぼ出生段にトレースできる。金剛智訳には「灌頂」の語が無いが、「以金剛道場名而為之号」とり、他の菩薩の出生段からこれが灌頂を指すことは明らかであり、相違があるとはいえない。前半の傍線の無い語句も、纒發心轉法輪菩薩に由来すると考えられ、出生段にも同様の語句を見ることができるとする。「無量無數諸如來」の句も出生段に由来すると思われるが、これは他の菩薩にも共通の「一切如來」から採られたものである。

石山本は金剛智訳に一致。

(一一) 金剛語菩薩

金剛語菩薩も「我今敬禮金剛語 金剛念誦無音響 能授悉地自在願 無言
說法難可測」「金剛上悉地難遇 金剛言說授灌頂」の傍線部は金剛智訳に一
致する語句である。「金剛言說授灌頂」は出生段に「金剛語言名號而與灌頂」
とあり、「金剛念誦住佛掌」も出生段による。「金剛速獲聞持藏」は円仁本出
生段に「秘密語言 以此念誦 能速成就」とあり、金剛智訳では「於諸如來
秘 能為速成就」となっている。「聞持藏」に相当する語句は無いが、意味
的に問題は無いであろう。「金剛自在成實言 金剛智性曉密語」も同様であ
る。ただし「金剛智性」の語については三巻本出生段に「於一切如來 眞言
速成就 金剛法智性。一切如來智慧。大轉輪智^⑩」と見ることが出来る。
石山本は金剛智訳に一致。

(一二) 金剛業菩薩

金剛業菩薩の「敬禮金剛巧昆首 金剛羯磨速成就 金剛妙教不唐捐 善遍
一切所受用」「金剛大寬廣方便」の傍線部は金剛智訳に一致する語句である。
また「不唐捐」の語は出生段に見える。「金剛羯磨住佛掌 光出蓮華羯磨輪
金剛輪現微塵佛 羯磨輪成佛法事」「羯磨光明授灌頂」も出生段によるとい
えよう。「光明」については、出生段に「金剛爲一切如來羯磨光明遍照一切
世界」とある。また「羯磨輪」「金剛輪」についても出生段に「轉一切如來
羯磨輪」と見られ、出生段前半の「羯磨身」「金剛身」を言い換えたものと

見られる。「大金剛持無怯畏 金剛巧智證悉地」も出生段の唵陀南「金剛巧
羯磨 是一切如來 最上羯磨智 一切妙佛事 普皆能作之」を言い換えたも
のとみてよいであろう。

石山本は金剛智訳に一致。

(一四) 金剛護菩薩

金剛護菩薩の「我今敬禮金剛護 摩訶無畏普遍覆 金剛甲冑大精進 大堅
固威魔恐怖」「難可敵對鬪戰勝 上首精進爲親友 金剛精進進衆生」の傍線
部は金剛智訳に一致する語句である。また「大精進」「威魔恐怖」「鬪戰勝」
については出生段に「鬪戰難勝勇健精進」とあり、また「爲親友」は唵陀喃
に「爲護精進者 名爲大親友」と見られる。「普遍覆」「進衆生」の語は見ら
れないが、内容的に導かれよう。「金剛甲身住佛掌 甲冑現出微塵佛 神變
遊戲金剛友 擁護一切欲成就」「甲冑堅牢授灌頂」も出生段に「金剛甲冑身
住佛手中又從甲冑出一切世界微塵等如來身現一切如來擁護廣大事業及神變遊
戲」とあり、また「金剛友名號而與灌頂時金剛友菩薩摩訶薩」とあって、こ
れらに拠るといえよう。

石山本は金剛智訳に一致。

(一五) 金剛牙菩薩

金剛牙菩薩の「敬禮金剛大藥叉 摩訶方便顯忿怒 金剛牙口銜器仗 甚可
怖畏能調伏 金剛上現暴惡身 摧伏魔王憍慢心」「金剛獷惡無能喻」の傍線

部は金剛智訳に一致する語句である。但し出生段では「金剛大葉又」の「大」は無く、「獷惡」は「暴惡」であるが、百八名讚でも「現暴惡身」とあり、出生段にも「現作暴惡身」とあるが、意味は同じである。また「金剛牙口衝器仗」は出生段に「金剛牙器仗置已口中」とある。「顯忿怒」「能調伏」「無能喻」は、同じ語は見られないが、文意として問題は無い。「金剛牙身住佛掌 金剛牙現微塵佛」は出生段に「大金剛牙身住於佛掌又從金剛牙出一切世界微塵等如來身」とあり、「金剛牙威授灌頂」は出生段に「以金剛暴惡名號而與灌頂」とある。「佛神力故現奮迅 調伏暴惡自在者」も、そのままの語は見られないが、「調伏」「暴惡」の語は見られ、金剛牙菩薩の性格によるといえよう。「初修佛福生天界 一念勝負魔王位」については未検。直前の金剛拳菩薩によつて摧伏される「魔王の憍慢心」を説明するものか。

石山本は金剛智訳に一致。

(二六) 金剛拳菩薩

金剛拳菩薩の「我今敬禮金剛密 善現驗縛身口意 金剛縛身住佛掌」「金剛拳上勝無比 三摩地中金剛拳 善能解放授灌頂」の傍線部は金剛智訳に一致する語句である。但し「金剛密」は金剛智訳の「令」字が略されている。「縛身口意」は出生段の「一切如來身口意金剛縛三摩地」による。「金剛縛身住佛掌 縛印出現微塵佛 一一印契是神力」は出生段の「成金剛縛身住於佛掌又從金剛縛出一切世界微塵等如來身」による。「授灌頂」も出生段の「以金剛拳名號而與灌頂」による。

石山本は金剛智訳に一致。

以上、百八名讚においては、円仁本では十六大菩薩出生段の内容を取り込んだ記述が見られ、その本文も円仁本の出生段本文が近く、金剛智訳や根本タントラの漢訳である三卷本とは語句的に相違するようである。また百八名讚における十六大菩薩出生段からの竄入は、円仁本・東寺本という六卷本独特のものと思われ、他の漢訳経軌類には検出できていない。また金剛宝・金剛光菩薩において、八十卷『華嚴経』にトレースされる語句を見出せたが、それ以外の菩薩においては確認されない。これが漢訳『華嚴経』から採られたか、原典に『華嚴経』からの竄入があったのかは断言できないが、漢訳語の一致する点と、他に見られないことからすれば、漢訳『華嚴経』からの引用とみたい。ただしその意図は明らかでは無く、今後の課題としたい

それに対して石山本は、その本文の大部分が六卷本と一致し、百八名讚でも冒頭の「讚誦一百八金剛菩薩異名品第三十三」といふ品題に続いて「爾時世尊告言持誦修瑜伽者」の一文が見られる点は円仁本と一致しながら、百八名讚そのものは金剛薩埵段において出生段からの竄入が削られ、金剛愛菩薩段以降は全く金剛智訳と一致する本文となっている。

五 造曼荼羅法

次いで目に付く六卷本と金剛智訳との相違は、六卷本で第四巻の冒頭に位置する造曼荼羅法の箇所である。六卷本では「灌頂闍梨嚴治曼荼羅想五色粉品第三十」「三十七灌頂道場種主梵名品第三十一」とされるが、金剛智訳とで本文の前後が入れ替わる部分があり、その構成が相違している。これにつ

いては既に指摘^⑪しているが、ここで改めて検討したい。また内容によって少し細かく分割し直した。

六卷本

金剛智訳

- | | |
|----------|----------|
| ① 作壇処加持 | ① 作壇処加持 |
| ② × | ② 作壇処の種類 |
| ③ 壇の大きさ | ④ 治地法 |
| ④ 治地法 | ③ 壇の大きさ |
| ⑤ 五色粉法 | ⑥ 大曼荼羅画作 |
| ⑥ 大曼荼羅画作 | ⑤ 五色粉法 |
| ⑦ 十六大菩薩名 | ⑧ 結壇法 |
| ⑧ 結壇法 | ⑪ 三昧耶曼荼羅 |
| ⑨ 自語言印 | ⑨ 自語言契 |
| ⑩ 三十七尊梵名 | ⑩ 三十七尊梵名 |
| ⑪ 三昧耶曼荼羅 | ⑦ 十六大菩薩名 |
| ⑫ 諸天 | ⑫ 諸天 |

① 作壇処加持

金剛智訳では「所応作漫荼羅。於中如法式。坐修習加持自身」とのみある所が、六卷本では初めに「灌頂闍梨嚴治曼荼羅想五色粉品第三十」という品題が付され「爾時世尊修瑜伽者結跏趺坐已諦想己身是如來身此想成就修加持法」とあって、金剛智訳で言う「法式の如し」という内容について述べられている。円仁本・東寺本・石山本共に同じ。

② 作壇処の種類、③ 壇の大きさ、④ 治地法

金剛智訳には④治地法の前に、②の作壇の処・扱地法は『蘇悉地経』と異ならないとする一文が存在する。これは六卷本には存在しない記述である。

また金剛智訳の④治地法では、瞿摩夷塗拭の後に、繩による緋（墨打ち）法が述べられ、その後に③の施主によって作るべき壇の大きさの相違が続き、四肘壇法を為すとされる。

しかし六卷本では、②が無く、①に続いて③が述べられ、その後に④治地法が来るが「假令四肘壇法先用瞿摩淨潔塗拭取新淨繩依量拵更以塗香密細塗之」とのみあって、設え四肘壇法であっても、瞿摩夷塗拭などの治地法を為すべきとされる。ただし内容的にはかなり簡略化されている。円仁本・東寺本に相違は無い。

石山本は、①の後に「其作壇處或新作淨室或舊淨室擇地等法廣如檢悉地具説」とあって、③④と続く。この一文は金剛智訳の②冒頭であるが、金剛智訳の「不異蘇悉地説」が、石山本では「廣如檢悉地具説」に変わっている。また③④は円仁本と同じである。

③の施主によって作るべき壇の大きさの相違は、実際の作壇に入る前の規定であり、④治地法の前に置かれる六卷本の方が位置的に相応しいように思われる。

⑤ 五色粉法、⑥ 大曼荼羅画作

次に大曼荼羅の諸尊画作について述べられるが、金剛智訳が④の最後に「何況地上。其為四肘壇法」とあるのを受けて、その四肘壇の曼荼羅画作に

ついで述べ、その後用いるべき五色粉の説明をするのに対して、六巻本では先に五色粉に付いての説明を述べた後に、曼荼羅画作について述べる。これも六巻本の方が位置的に相応しいようである。ここで円仁本に対して東寺本は乱丁があり、文章の前後している所があるが、訂正して繋げてみれば、概ね円仁本に一致している。

これに対して石山本は、本文は概ね円仁本に近いが、金剛智訳に一致するところもあり、五色粉の中の赤色中に置く字（加持する種子）の音写が円仁本の「耶含」ではなく、金剛智訳の「琰」に直されている。また五色粉を加持する真言の次の印契の説明の前に「契經云」とあるが、これは円仁本・金剛智訳共に見られない語句である。逆に円仁本に見られる「爾時世尊」「佛言」などの句が省略されている点は金剛智訳に近い点である。

⑦十六大菩薩名、⑧結壇法、⑨自語言印、⑩三十七尊梵名、⑪三昧耶曼荼羅、⑫諸天

六巻本で⑥大曼荼羅画作に続いて⑦十六大菩薩名が在るのは、そこまでが大曼荼羅の画作であり、それを⑧結壇法によって完成させるのであろう。この十六大菩薩は、四仏の四親近菩薩では無く、賢劫十六尊である。現図金剛界九会曼荼羅からすれば、中心の大曼荼羅（成身会）には賢劫千仏のみが画かれ、十六尊は登場しない。十六尊が画かれるようになるのは三昧耶会以降であるから、金剛智訳の方が位置的に良いようであるが、現図九会曼荼羅としてでは無く、個別（一会）の曼荼羅として考えれば、大曼荼羅でも賢劫十六尊を画いたと考えることができる。実際、天台系で傳承されている「金剛界八十一尊曼荼羅」は第二重院に、賢劫千仏を背景として、四摂菩薩・四大

明王と共に賢劫十六尊を置いている³²。その後の⑨自語言印、⑩三十七尊梵名は、大曼荼羅に画いた諸尊を加持し勸請する作法といえる。それに対して⑪三昧耶曼荼羅、⑫諸天は、大曼荼羅を画作できない場合の三昧耶曼荼羅造立を説くもので、⑫諸天はその外金剛部である。円仁本・東寺本・石山本共に同じである。

これに対して金剛智訳では⑧⑪⑨⑩⑦⑫となっており、画いた大曼荼羅を⑧結壇法により完成し、次いで⑪三昧耶曼荼羅を画作し、その画作した大曼荼羅と三昧耶曼荼羅に共通して⑨⑩によって曼荼羅に諸尊を勸請するという次第であろう。また賢劫十六尊が後ろに置かれるのは、現図と同様に、三昧耶会以降に限定する意図を示すものか。

以上のような曼荼羅造立における六巻本と金剛智訳との相違は、翻訳原典としての儀軌段階に遡るものように思われる。漢訳された儀軌を元に中国で改変することで、このような基本的な考え方の相違が生ずるかは疑問であろう。決定的な証拠といえるものには無いが、やはり金剛智訳とは別に、六巻本の原典となる儀軌の存在した可能性を考えさせる。また円仁本と石山本との相違は、円仁本を元に、金剛智訳本によって本文の一部を改変（治定）したことによるのではないだろうか。石山本の五色粉法のみに見られる「契經云」は、六巻本のその他の箇所にも真言・印契を説く箇所に見られるもので、それを取り入れたものであるか（日本における書写過程での竄入の可能性も考えられる）。とすれば、これによって石山本の原典が円仁本と別に存在した証拠とはできないであろう。

まとめ

これまでの所を再確認すると、六卷本『略出念誦法』の全体は、金剛智訳四卷本『略出念誦経』と対応し、『略出念誦法』の完本といえることができる。本文は金剛智訳と相違する点が多く、用語的にも、金剛智訳の「密語」や『金剛頂経義訣』の「真言」が「陀羅尼」となっている、或いは「三摩耶」が「三摩地」となっている、「平等性智」が「大円鏡智」になっている箇所が見られるなどの相違点が指摘されている³³。

百八名讃は、六卷本において十六大菩薩出生段の内容を取り込んだ記述が見られ、その本文も六卷本の出生段本文が近く、金剛智訳四卷本や根本 Tantra の漢訳である三卷本とは語句的に相違するようである。また百八名讃における十六大菩薩出生段からの竄入は、円仁本・東寺本という六卷本独特のものと思われ、他の漢訳経軌類には検出できていない。また金剛宝・金剛光菩薩において、実叉難陀訳八十卷『華嚴経』にトレースされる語句を見出せたが、それ以外の菩薩においては確認されない。これが漢訳『華嚴経』から採られたか、原典に『華嚴経』からの竄入があったのかは断言できないが、漢訳語の一致する点と、他に見られないことからすれば、漢訳『華嚴経』からの引用とみたい。ただしその意図は明らかでは無く、今後の課題としたい。少なくとも六卷本漢訳者（制作者）が、漢訳八十卷本『華嚴経』を知っていたことだけは確かであろう。

造曼荼羅法においても、造壇・大曼荼羅画作・三昧耶曼荼羅画作の過程において次第構成が異なっており、基本的な考え方の相違していた可能性があ

る。六卷本の構成が、造壇法から大曼荼羅を画き、諸尊を勧請し、曼荼羅を完成した後に、大曼荼羅を造立できない場合には三昧耶曼荼羅を画作するというのは、作法次第として理に適っているように思われるが、また金剛智訳で大曼荼羅画作と三昧耶曼荼羅画作を先に述べた後で、諸尊の勧請・結壇法となるのも、また別の考え方として成立しよう。この相違は、金剛智訳の作法次第の矛盾を六卷本で解消するためのものとはばかりはいえないであろう。

それに対して石山本は、全体が四巻に調卷されており、その本文の大部分が六巻本と一致しているながら『金剛頂経義訣』引用部分や百八名讃などにおいて金剛智訳と一致する本文に修正（治定）されている。造曼荼羅法においても、次第構成は六巻本に一致しながら、金剛智訳にあって、六巻本に無い記事を補う様子が窺える。これは六巻本を基本としながら、金剛智訳によって修正を加えた結果といえよう。決して金剛智訳から六巻本への変更過程の途中段階とは考えられない。

全体を厳密に対照すれば、もっと多くの箇所が見られるであろうが、いままで見てきたところから考えられる可能性について指摘し、本稿の結論としたい。

即ち六巻本『略出念誦法』は、四巻本『略出念誦経』の原典とは異なった梵語原典から別個に漢訳されたもので、広い意味では同本異訳であるが、原典の本文には相違があった可能性がある。その場合「三摩耶」と「三摩地」、「密語・真言」と「陀羅尼」といった用語の相違も原典によるものである可能性が考えられる。

石山本は、完成した漢訳六巻本と金剛智訳四巻本を対照しながら、六巻本の本文を修正（治定）したもので、その修正作業に並行しながら『金剛頂経

義訣』が撰述されたのではないかと考えられよう。その修正（治定）作業は、恐らく六巻本の原典を十全ではないと考えた訳者が、より正しい本文にしようとした（治定しようとした）ものではないかと想像する。具体的な根拠は挙げ得ないが、用語の相違の問題にしても。百八名讃の本文にしても、三巻本やその他の漢訳経軌からみておかしいと思われるところを修正しようとしているように思われる。造曼荼羅法における本文の前後の相違もまた、原典における修法次第・曼荼羅の構成に関する考え方の相違を示すものと思われ、それは中国における修正作業の過程で考えられるものでは無く、やはり梵語原典の時点で存在した相違のように思われる。また円仁本から石山本への修正（治定）作業自体も試行錯誤しながらのものであったのではないかと。石山本第四巻の本文が、金剛智訳第四巻のままであることは、この部分を完全に金剛智訳へ変更したという考え方もあり得ようが、必ずしもそうとばかりはいえないであろう。六巻本には金剛智訳にない品題が付けられており、その品題は（位置に問題は残るもの）石山本にも踏襲されている。これは六巻本の治定作業が、六巻本の品構成によって金剛智訳を分割し、そこから両本を校合した作業過程を反映するものではないだろうか。

経録に六巻本『略出念誦法』が著録されないのは、この修正（治定）作業が未だ終わっていないからでは無いか。既に空海が『金剛頂経義訣』上巻を日本へ将来している以上、六巻本の訳出も、石山本作成に至る修正（治定）作業も、空海の入唐以前であったことが考えられる。とすればその漢訳・修正（治定）・註記（『金剛頂経義訣』の作成）といったことが、不空による、或いは不空の近くで行われた可能性があるのではないかと。空海の将来した『金剛頂経義訣』が上巻だけであるのも、作業の途中で中断されて終わった可能性を

考えさせる。安然の『八家秘録』における「六巻を治定して四巻にした」とする記事は、安然が意図するような金剛智訳におけるものではないが、円仁本から石山本への改変を指す可能性があるであろう。具体的・直接的な証拠は提示し得ないし、多く憶測とも言うべきレベルに止まるものではあるが、現時点で考え得る可能性として、以上を結論としておきたい。

注

- (1) 清田寂雲「金剛頂略出念誦経について―六巻本と四巻本との比較―」（『印仏研』第三十卷一号一九八二年）
- (2) 三崎良周「『金剛頂瑜伽中略出念誦経』についての一考察」（『天台学报』第二十四号一九八二年）
- (3) 清田寂雲校訂・翻刻「六巻本『略出経』」「続天台宗全書」密教2「経典註釈類」1
- (4) 遠藤祐純・苦米地誠一「『金剛頂瑜伽中略出念誦経』六巻本・四巻本対照研究」（川崎大師教学研究所刊『仏教文化論集』第5号、一九八八年九月）
- (5) 大正大学総合仏教研究所金剛頂経研究会『六巻本『金剛頂瑜伽中略出念誦法』の研究―慈覚大師将来本校訂訳注篇』（ノンブル社、一九九九年）
- (6) 大正大学総合仏教研究所金剛頂経研究会『六巻本『金剛頂瑜伽中略出念誦法』の研究―別本（東寺観智院本・石山寺本）翻刻篇』（ノンブル社、二〇〇六年）
- (7) 大村西崖『密教発達志』四五頁（仏書刊行会、一九一八年）
- (8) 『大正藏経』第五十五卷一一一三頁上
- (9) 『大正藏経』第五十五卷一〇八九頁下
- (10) 『大正藏経』第五十五卷一一〇八頁上
- (11) 『大正藏経』第五十五卷一一一四頁中

- (12) 『大正藏經』第五十五卷六〇三頁中、他
- (13) 『大正藏經』第七十七卷七八八頁中
- (14) 遠藤祐純「金剛頂經大瑜伽秘密心地法門義訣」について(『密教文化』第一六〇号一九八七年)。同「略出念誦經—四卷本と六卷本—」(『密教研究』第二十一号一九八九年)。同「新出『金剛頂瑜伽中略出念誦法』六卷本」(牧尾良海博士喜寿記念『儒仏道三教思想論攷』山喜房仏書林、一九九一年)。前注(5)書に再録。
- (15) 『弘法大師全集』第一輯九三頁。『定本弘法大師全集』第一卷二九頁
- (16) 『弘法大師全集』第一輯四七頁。『定本弘法大師全集』第一卷一一五頁
- (17) 『大正藏經』第七十七卷八六五頁上
- (18) 『大正藏經』第五十五卷一一一六頁上
- (19) 『大正藏經』第七十五卷九四五頁中〜下
- (20) 『大正藏經』第三十九卷八〇八頁中〜下
- (21) 『大正藏經』第五十五卷五七一頁中
- (22) 『大正藏經』第三十九卷八〇八頁上〜八二二頁上
- (23) 『大正藏經』第十八卷二二三頁中〜二五三頁下
- (24) 『大正藏經』第十八卷二一六頁中〜下。また十六大菩薩出生段は二〇八頁中〜二二三頁下
- (25) 『大正藏經』第十卷一九五頁下
- (26) 『大正藏經』第十卷五六頁下
- (27) 『大正藏經』第十卷一九八頁中
- (28) 『大正藏經』第十卷八八頁上
- (29) 『大正藏經』第九卷三六頁下〜三八頁中
- (30) 『大正藏經』第一八卷二二二頁上
- (31) 前注4 遠藤祐純・苦米地誠一論文。並びに前注5 書訳注篇三〇一頁
- (32) 中野玄三『日本の美術』四三二号「阿界曼荼羅」(至文堂二〇〇二年五月) 六四頁などを参照。金剛界八十一尊曼荼羅の図像については「石山寺版『金剛界八十一尊曼荼羅』『大正藏經』「図像部」第一卷別紙一三。『叡山本金剛界曼荼羅』『大正藏經』「図像部」第二卷六九三〜七〇六頁。妙法院版『金剛界曼荼羅』『大正藏經』「図像部」第二卷別紙三など。遺品には根津美術館本、兵庫・太山寺本、奈良国立博物館本、出光美術館本、その他などが知られる。根津美術館本の写真には『日本の美術』や各種展覧会図録中に掲載される。
- (33) 遠藤祐純「略出念誦經—四卷本と六卷本—」(『密教研究』第二十一号一九八九年)。前注(5)書に再録。